第 41 回全国選抜高校テニス大会の視察を終えて

北海道帯広三条高等学校テニス部顧問　堀口人士

【概要】（写真：開会式）

2019 年３月 20 日（水）～25 日（月）にかけて、福岡県福岡市で開催された第 41 回全国選抜高校テニス大会の視察を行ってきた。初めて全国大会の場に行くことができ、全国大会を戦う選手達のプレーを目にすることができた。また、この大会を戦う北海道の選手を応援することができた。全国の選手のプレーの多くは、「速く、ミスがない」という印象だった。一方で、高校からテニスを始め、懸命にプレーしている選手も多いことを知ることができた。全国のテニスをする高校生が目指す全国大会を視察することで、目指すべきレベルの高さや自分が関わってきた選手達との差を実感することができ、「勝負できる」という印象も持つことができた。視察を行った６日間を通して、高校テニスについて、部活動について、沢山のことを考えることができた。

【はじめに】

この視察にあたり派遣に携わっていただいた、松浦委員長・長永常任理事はじめ北海道高体連テニス専門部の皆さんに感謝する。また、年度末の多忙な時期に職場を離れることに理解をしめしてくれた北海道帯広三条高等学校の職員および生徒の皆さん、長期の出張に理解をしめしてくれた家族に感謝する。

開会式から団体戦決勝までの大会期間中に感じたこと、先生方との交流から考えたことをレポートとしてまとまることにする。堀口個人の意見も多く、事実と異なる部分や、現在審議されている部分も含まれることを了承いただきたい。また、私が顧問をするチームから出された“宿題”についても回答をしていく。

【開会式を見て】（写真：選手宣誓）

天候にも恵まれた中での開会式。地元高校吹奏楽部の演奏に乗せての入場行進より始まる。優勝旗とプラカードを持った選手を残し、他の選手はセンターコートの観客席に座る。色とりどりのウォーマーに身を包み整列する姿は壮観であった。開会式では、初出場ということもあり、北海道１位で全国大会に駒を進めた立命館慶祥高校主将の佐藤くんが選手宣誓に選ばれた。地震の影響で地区予選が延期になったことに触れ、テニスができることを嬉しく思っていること、支えてくれた人々に感謝をし、精一杯のプレーをすることを誓ってくれた。各地区の優勝旗に囲まれながら、立派な宣誓をしてくれた。

【団体戦から】（写真：立命館慶祥 D1）

北海道が関わる団体戦のうち、観戦できたものについて報告する。基本的に１面で試合を行う。空きが生じたら順次使用する面数を増やしていくような運営であった。

立命館慶祥　対　名経大市邨（愛知県）　１－４（06,63,06,06,06）

大会２日目で２面展開となる。No.１をＤ１に起用。そのダブルスをとる。外コートでボールを打っていないという影響が出ている試合が多かったように感じた。名経大市邨の S1 の選手は個人戦の優勝者。その選手とシングルスを戦ったという経験を今後のプレーに活かして欲しい。

札幌開成　対　修道（広島県）　２－３（63,57,61,36,06）

Ｓ１、Ｓ２が勝利。北海道代表の団体戦で初めてＳ１をとるところを見ることができた。序盤はミスが多かった

が、つなぐためのスピンやスライスがコースに収まりだし、リズムを変えたりしながら徐々にペースをつかんでいく。オーバーペースになる相手に対して、スピン系のボールでラリー戦を制して勝利をしてくれた。S２は飄々としたプレーであっというまに勝利を掴む。サービスキープが続くＤ１に勝負がかかる。先にブレークされるも、すぐさまブレークバックして追いつくといった展開。一進一退の攻防で５−５となったが、長いゲームとなった第 11 ゲームをキープされ、第 12 ゲームをブレークされてゲームセット。D２とＳ３も検討したが力及ばす、とても惜しい試合で敗退となった。

札幌啓成　対　東京学館船橋（千葉県）　１−４（46,61,16,06,26）

大会２日目で２面展開。S１はお互いにベースラインからウィナーを狙っていくスタイル。ブレークが多い展開であったが、３−３からキープをして４−３とリードすることができた。ブレークポイントをしのがれキープされる。相手に粘られてポイントを失うという場面もあり、ウィナーかエラーか、どちらかといった展開。緊張した場面、自分がベンチに座っていることを考えてみる。どのような声掛けができるだろうか。選手を信じて「精一杯やれ」と送り出すことくらいしかできないかもしれない。相手のファーストサーブが入らないため、勝負をしたい場面であったが、惜しくもキープされゲームセット。D１は余裕の展開で危なげなく勝利。S２・D２は相手が非常に強かった。S３は力の差がありつつも、頑張ってラリーをしている。つなぐラリーが出来始めて２−５とするも、その後は惜しくも取ることができず敗退。

北星女子　対　宮崎商業（宮崎県）　２−３（16,62,06,63,06）

Ｓ１はスコア以上にせった展開であった。攻められる展開が多かったが、粘り強くストロークを続けるもゲームは取れない。デュースからの残り２ポイントが遠い。相手が攻め始め良いプレーをしていた。先手を取らないと一気に流れを持っていかれるということだろう。D１は先にポーチするなど自分たちのペースでプレーする時間が多かった。最後は相手がペースを崩す場面も多くあり、北星女子の良いプレーが多かった。D２はお互いにアンダーサーブを使うなど北海道大会との同じような試合を見られた。全国でもこうしたプレーが見られることに勇気をもらった。S２・S３は相手のレベルが高く、精一杯のプレーをするも敗退。

札幌西　対　九州文化学園（長崎県）　１−４（06,60,26,16,06）

北星女子と同じ時間で試合が行われる。観戦できたＤ１は自分たちのプレーを堅実に行い、ポーチで先に動いてポイントをとる場面を多く見ることができた。シングルスは非常に強い。このシングルスを戦う３本が九州文化の強さなのだろう。

【個人戦】

札幌啓成の照井さんが、予選を勝ち抜き本戦の３回戦まで進んだ。ベスト８相当（不規則なトーナメントのため）の成績を残したことが素晴らしかった。冬シーズン明けであり、外でボールを打つことが久々という状況だったというから驚きである。ベースラインから下がらず、フラット系の球でどんどん攻めていくプレースタイルは全国トップの“それ”であると感じた。北海道を代表した４名の選手は予選で敗退となってしまったが、それぞれが精一杯のプレーをしている姿を見ることができた。スコアが離れてしまっている試合もあったが、スコア以上にせった内容であるということを感じた。デュースまではいくが、あと２ポイントが取れないといった状況も多かったように感じる。この２ポイントが全国と北海道の差なのかもしれない。

【試合を見ながら考えたこと】

選手のプレー

ブレークポイントを握られても守りに入らない勇気が必要。攻めていかないと、そのポイントを取ることができない。「監督も思い切っていけ」と声掛けをしている。その後、ストレートアタックをしてポイントを取ることができていた。攻めの気持ち、諦めない気持ちの効果か。焦らない、かっこよく決めようとしないことが大切。選手の中には、セルフジャッジやソロチェアアンパイアによる試合が多いためか（選抜全国大会でも個人戦の予

選がセルフジャッジ、本戦はソロチェアアンパイアであった)、アウトのボールに対してハンドシグナルをする選手がいた。トップの選手がやっている場面もあるので、影響が心配ではある。しかし、審判のジャッジに対して抗議をするといった場面はなかった。毅然とした態度で審判を行っているためか。「納得がいかない」といった表情や仕草をする選手もいたが、それ以上に何かをする訳ではなく、次のプレーを始めていた。気持ちの切り替えをして、次のポイントをプレーする姿は、やはり全国大会を戦う選手という感じである。

コーチング

コーチングともとれるような応援や声掛け。「足を動かして」「前へいって」など、全国では結構あるようだが、果たして良いものか。一方で「強気」「笑顔で」といった声掛けが多いが。上位の大会では多いのだろうか。コーチングのような応援をしたくなる気持ちはよくわかるが、北海道大会では現状のコーチングのない応援を維持したい。

【選抜で勝つために】(写真:札幌啓成団体戦)

ジュニアの子達が集まると希望があるかもしれない。ただそれだけでは勝てないだろう。部活として、チームとして、ひとつの目標に向かって進んでいく中で、まとまりが生まれ、強いチームになっていくのではないだろうか。ただ、試合で勝つためには、クラブチームやスクールの助けは必要なのかもしれない。そこの折り合いをどうしていくのか、部活とスクールの上手な使い方を、子どもたちが選択して、我々がサポートしていくということが必要なのだろう。現在のチームではスクールに通っている選手はおらず、部活のみでテニスを行っているが、過去を見るとスクールにも通ってテニスをやっている選手が上手になっている事実もある。しかし、スクール通いの寄せ集めが、勝利を、掴んでいく状況は避けたい。チームとして努力しているところに勝って欲しいし、勝たせてあげたい。ソフトテニスをやっていたところから強くなるという道もいい。前任校ではそうした選手が力をつけ、全道常連となり、個人戦でもベスト 16 を常にとっていた。

センバツは夢の舞台である。ここに立つのを目指すのか、勝つことを目指すのか、はたまた優勝を目指すのか。子どもたちの目標とチームとしての目標を明確にして、そこに向かって進んでいけるチームにこそ、この舞台はふさわしい。我々にできることは、選手が笑顔でプレーできる環境や機会、雰囲気を作ることなのかもしれない。

【どんなレベルであれ】

選抜全国大会では様々なレベルの選手がコートに立っていた。ただ、共通して言えることは、上手でも、下手でも、一生懸命やっている人が輝いているということ。それは選手でも審判でも一緒であると感じた。福岡の審判は輝いていたと思う。

私が顧問として、プロとしてテニスで生きていく人に関わることはおそらくないだろう。しかし、テニスを通して、考え方を学び、一生懸命にやって、輝いていた経験を持っている人には関わることができるはずである。そんな人は自分の人生を主体的に、前向きに歩んでいけると思う。そんな人を 1 人でも多く育てられる人になりたい。

【審判について:北海道インターハイに向けて】

審判のマニュアル作りは必須である。全国大会を毎年開催している福岡県との情報の共有は必要であると感じた。ゲームを進行するだけでなく、問題が起きた際の対応について協議する必要はある。男子団体準決勝でもジャッジの取り扱いによって、10 分程度試合が中断する場面があった(しかも第 3 セットのタイブレークで)。ジャッジによってプレーが止まったためのレットなのか、明らかなウィナーなので有効なのか

（上記の場合は結局レットとなった）。せった場面で、チームの運命、子どもたちの運命を左右する場合がある。慎重に対応することが必要である。

【これからのセンバツ】

インターハイとセンバツ。大きな違いは団体戦の人数にある（個人戦の有無等もあるが)。５人チームで４人が戦うインターハイに対して、７人～９人チームで７人が戦うセンバツ。この人数にも見直す動きが出てきているらしい。現在、話し合いの舞台に上がり始めたという段階であるため、今すぐにどうこうという状況ではないが、センバツの将来を考えていく上では、人数の見直しは切っても切り離せないだろう。

今大会に参加している女子のチームには９人が揃っていないというところがあった。他府県では７人が揃わずに、予選に参加できない学校も多いと聞く。子どもの数が減ることで、当然テニスを選択する選手の数も減る。７人を集めてチームを組むこと自体が難しいというのが現状のようである。前任校では、助っ人を借りて支部予選を勝ち抜き全道大会へ出場するという経験をしたが、助っ人が集まらず支部予選にも参加することができないこともあった。７人という人数によって、参加の機会がなかった選手もいるということである。

一方で、７人だからこそ強豪校からも勝利を掴めるという一面もある。７人全員が上手な選手ということはあまりない。郡部の学校やジュニアの選手がいない学校からも全国を目指して戦う「夢」があるのも事実である。実際、ソフトテニス経験者が硬式に転向し、ジュニアの選手に勝利するということも少なくない。ジュニアのＳ１・Ｓ２人には勝てなくても、ダブルス２つとＳ３で勝負として、強豪校に勝つというシナリオは７人だからこそできることである。

私は７人が揃わないために出場がかなわなかったことも、７人だからこそ上位進出を本気で考えたことも、両方経験している。だからこそ、人数が減らすことで参加校を増やすというメリットも、人数が多いことで夢を見られるというメリットも、共に理解することができる。この問題には慎重に、でも一定の速度で話し合いを進めていく必要があると考える。

【テニスで未来を切り開く】

会場には各大学の体育会で活動する大学生がたくさん来ていた。大学のパンフレットを持ち、試合が終わった後の選手に声をかけ勧誘している様子だった。センバツを戦う選手たちには、テニスで未来を切り開くという選択肢があるのだろう。プロテニスプレイヤーとなる道、テニスで大学に進む道。全道大会でも札幌の私立大学が選手に声をかける場面を目にしたが、それ以上にテニスが自分の将来につながるという意識が高いことが感じられた。

【テニスに関わる】（写真：バモス！わたなべさんと共に）

お笑い芸人のバモス！わたなべさん（吉本興業）が副応援団長として、大会期間中ずっと会場で選手の試合を応援、選手や観客との記念撮影に応じていた（このレポートに写真を掲載することも了承していただいた)。バモスさんも宮崎県でのダブルス優勝経験を持つ方。芸人という形でテニスの普及に関わっている。こうした取り組みも大変素晴らしいと感じた。我々は、高校教員という立場で高校テニスを支えるだけでなく、できることであればテニスの普及に関わりたい。果たして自分に何ができるのか。自分の立場に許されたことを精一杯やってみたい。

【宿題へのアンサー】

チームから出された宿題への回答をここで行いたいと思う。今までに記載している部分もあり重複する場合もあるがご容赦いただきたい。

① 試合でミスをした時の対応
② プレーヤー以外のチームメイトの動き
③ 審判（コールやジャッジ）

まず①について。ミスをしても顔に出さない選手、天を仰ぐ選手、悔しそうにする選手、様々であった。しかし、共通していることは、次のポイントでは切り替えてプレーしている点。１ポイントごとに切り替えてプレーすることは、テニスにおいて必須のこと。しかし、それを行うことは容易いものではない。ポイントに入る前のルーティーンを大切にしている選手も多かったことから、ルーティーンで気持ちをリセットしているのかもしれない。これは今すぐにでも取り入れられることだと感じた。

続いて②について。プレーヤー以外の選手は、応援を全力で行うという感じ。ボールパーソンが必須というわけではなく（チームの判断に委ねられている）、全く出さないところもある。そのため、コートに立つ人以外は、皆全力で応援をしていた。試合前の３分間練習では、皆で歌を歌い、選手を鼓舞する。ポイントが終わったら、声援と拍手を送る。プレーヤーが気持ちよく、いつも通りのプレーができるように努めているようだった。

最後に③について。審判は「素晴らしかった」の一言である。当然ミスジャッジもある。しかし、毅然とした態度で大きな声でコールをするため、文句を言う選手はいなかった。審判が一生懸命行っているということが選手にも伝わっているからだろう。また、主審は線審のジャッジが誤っている場合は、コレクションをかける場面も多々あった。コレクションをかけられる主審を育てるのは大変かもしれない。４年後のインターハイに向けて審判の育成も重要な項目の一つである。まずは、大きな声で、精一杯の審判（道内では北見地区が素晴らしい）ができるようにしたい。チームとしての成熟度合いは、北海道が高いと思う。全国には個の集まりとして集団であるチームも少なくなかった。一方北海道のチームは、役割分担や積極的な動きなどチームとして機能していると感じる。

【さいごに】

５泊６日の福岡県の滞在。あっという間の時間であった。初めて全国大会でのプレー見て、そのレベルの高さに驚かされた（そんな速い球で、そこを狙うの？）。また、その舞台でプレーする北海道の選手を応援することができた。あんなに札幌の選手を応援したことはない（自分の地区の選手は応援するが）。

本気で出場を目指したこともあるセンバツの舞台。その夢舞台の雰囲気を感じることができた。次は選手を引率し、監督としてこの舞台に帰ってきたいと思う。ベンチに座って、自分が関わった選手が精一杯のプレーをして笑顔で試合をすることができる、そんな状況をサポートしたい。夢舞台である、センバツ。視察をすることで、夢が少し現実に近づいた。そう思える６日間だった。

思ったことをメモしながら６日間を過ごしてみた。結果として膨大な量のレポートとなってしまい申し訳ありません。以上で報告を終わる。